季刊

四季

第八号

四季社

一九八五年十月一日発行

定価 三〇〇円

目　次

季刊四季・第八号

ダヴィンチ「女の頭部」復写 …… 表紙
第五次『四季』確立（案）…… 表紙裏
母 …… 植村　清二　2
萩原朔太郎「日本への回帰」小考 …… 高田　瑞穂　4
個性的表現が集ったマスゲームを …… 山住　正己　9
秋來（李賀）…… 松枝茂夫訳　12
秋浦歌 …… 浅野　晃　14
秋一伊藤佐喜雄をおもふ …… 牛尾三千夫　16
まかふしぎ …… 小高根太郎　18
鍵 …… 杉山　平一　20
聖杯探求 …… 坂口　允男　22
訪問記 …… 高橋　渡　24
杞憂 …… 石山　直一　26
国境 …… 大野沢緑郎　29
「四季」創刊と立原 …… 江頭　彦造　35
聖なる山 …… 国友　則房　38
湧き水…… 小杉　茂樹　40
眼鏡 …… 福地　邦樹　42
筑波の小さな部屋から ……たかはし　しげおみ　44
浜木綿 …… 花井タヅ子　46
同人略歴 …… 48

第五次『四季』確立（案）

一、会員組織について

(1)実質同人が少すぎる（一九名）ので、少くとも四〇～五〇名を目標に毎号五～一〇名増員のこと。（一案…手近な所では、「四季」一本化へ）

(2)会員（固定購読者）の確保。辰雄→克己の線で全国数百名を目標に方策を立てて、実現を図ること。

二、経営（主に財政）の確立

(1)同人費は（世間並に）毎号五千円に改める。他に責任普及制（一人四冊位…二千円）を取る。

(2)会（員）費は毎号二千円でよいが、投稿をすすめて秀作を四～五篇必ず掲載する。

(3)編集・会計事務の予算支出を行なう。

三、編集・事務体制の強化

(1)編集委員会の設置。同人中の実力者（江頭・小杉他）数名を委員にして、毎号一～二回委員会を開いて、編集長の協力体制とする。

(2)事務局運営。有望な若手詩人（五〇～六〇代）を二～三名置いて、Ⓐ編集・校正・発送とⒷ会計事務処理を分担させる。

注…(1)(2)共に二～三万円の予算を組み、交通費・昼食代等実費を支給する。（「日月」等で実施中です）

四、発行回数の加減

(1)季刊でよいが、以上の体制強化に応じて年間発行回数を二回～六回の中で伸縮する。

――八五・八・二三　江頭・国友

母

植村清二

母は奈良県の北葛城郡・川西村の下永部落の生れである。家は農家でなく、紺屋であった。母の父（僕たちの外祖父）は、なかなか働き者で、家業が盛んだったらしく、母は幼い頃、いつも家の前に馬が二、三頭繋いであったのを憶えているという。今なら自動車の二、三台も、駐車していたのであろう。

しかしこの祖父は、早く亡くなった。あとには祖母と、母と、母の弟と、生れたばかりの妹と、曽祖母とが残された。ところが祖父の弟は、その頃まだ戸籍法が不備だったために、相続人の母の弟を、他家へ養子に出し、母を自分の実子にして、財産を横領してしまった。祖母は見切りをつけて、幼い母の妹を連れて、実家へ戻ってしまった。

母の叔父は、賭博好きで、兄のものであった家屋敷を、すっかり人手に渡してしまった。後にはしがない筆墨の行商をして、その日を送るようになった。母は賣り残された土蔵の中で曽祖母の世話をしていたが、曽祖母が死んでから、大阪に出て、女中奉公をし、やがて世話をする人があって、父のところへ片付いたのである。

父の商賣は、古着屋であった。今は生活がすっかり変って、姿を消してしまったが、むかしは、プレタ・ポルテ並に、至る処にあった。店の品物は、質の流れを引き取るのもあり、市で仲間買いをするのもあるが、個人が引越しなどの折に、不用品を拂われるのを、買い入れることもある。

ある日そういう拂いものがあって、父は蒲団を買い入れた。それがまたその日の中に、買手がついて、今夜中に届けてくれという。父は用事があって他出した。

「清二、一しょに運んでくれるかい」蒲団は一人で一疊しか担げない。母一人だと、二度往復しなければな

らない。勿論その頃リヤカーなんぞはない。

「行くよ」　僕はすぐ返事をした。

蒲団は、一疊ずつ縦に二つ折りして、肩に担ぐのである。母は掛蒲団を、僕は敷蒲団を担いだ。古いから、綿が固くて、水分を含んでいるから、小学校の五年生には重さがかなりこたえる。

母と子は、蒲団を担いで、冬の夜の町を歩いた。それでも五百メートルほどの距離を、無事に買主の家に届けた。

「清二、うどんでも食べようか」

帰りみちに母は言った。僕の労働を、ねぎらう氣持もあったのだろう。

二人は賑かな松屋町の通りに出て、角店のうどん屋に入った。

「マキ（小田巻）食べるかい」

ふだんは油揚の入った狐うどんにきまっている。熱いマキは実にうまかった。

僕が大学に入学した頃、家主が家を建て直すというので、父は表通りから路地裏に移った。それでも何とか商賣でその日を過ごしていた。僕は大学を卒業すると、高の知れた俸給の中から、父への仕送りは、毎月欠かさなかった。父からは、いつも丁寧な礼状が来た。

三年ばかりして、僕は松山の高等学校に赴任した。しばらくすると昇給した。僕は父への仕送りのほかに別に母の小遣に少しばかり送金した。一年ほど後に、帰省した折に、僕は母にたずねた。

「お母さん、いくらか貯ったかい」

「ああ、もう百円になったよ。堂に建てよか、藏に建てよかと思ってる」

その頃の百円は、いまの六、七十万円に当るだろうか。僕はその時の母のうれしそうな顔と声とを、今に忘れることができない。

萩原朔太郎「日本への回帰」小考

高田瑞穂

萩原朔太郎の「日本への回帰」が『いのち』に発表されたのは昭和十二年十二月のことであった。この一文を冒頭に、「詩論と文明評論」二十一篇と、「随筆と身辺雑記」十九篇とをまとめて一本とした『日本への回帰』が白水社から刊行されたのは、翌十三年三月であった。この時、明治十九年十一月一日に誕生した朔太郎は、数え年五十三歳であった。ここでは、「我が独り歌へるうた」と副題された「日本への回帰」に目を注ぐこととする。先ず、その冒頭の一節を引く。

「少し以前まで、西洋は僕等にとっての故郷であった。昔浦島の子がその魂の故郷を求めようとして、海の向うに龍宮をイメーヂしたやうに、僕等もまた海の向うに、西洋といふ蜃気楼をイメーヂした。だがその蜃気楼は、今日もはや僕等の幻想から消えてしまつた」

この一文は、短いながらも論理的構成を持った三章から成っている。その第一章は、「西洋といふ蜃気楼」の消滅によって、自らの「魂の故郷」を喪失したものの心情を告げる歌であった。

それを受けた第二章は、先ず、第一章の心情の歴史的裏づけであった。

「つまり言へば我々は、過去約七十年に亙る『国家的非常時』の外遊から、漸く初めて解放され、自分の家郷に帰省することが出来たのである。」

この時、朔太郎の内に湧き上ったものは何であったか。

「僕等は一切の物を喪失した。しかしながらまた僕等が傳統の日本人で、まさしく僕等の血管中に、祖先二千餘年の歴史が脈搏してゐるといふほど、疑ひのない事実はないのだ。そしてまたその限りに、僕等は何物をも喪失しては居ないのである。

我れは何物をも喪失せず
また一切を失ひ盡せり。

と僕はかつて或る抒情詩の中で歌つた。まことに今日、文化の崩壊した虚無の中から、僕等の詩人が歌ふべき一つの歌は、かかる二律背反によつて節奏された、ニヒルの漂泊者の歌でしかない。」

ここに引かれている詩句は、朔太郎の最後の詩集『氷島』（昭和九年刊）に収められている「乃木坂倶楽部」の一節である。「ニヒルの漂泊者の歌」の一典型であろう。その全文を引くこととする。

乃木坂倶楽部

十二月また来れり。
なんぞこの冬の寒きや。
去年はアパートの五階に住み
荒漠たる洋室の中

壁に寝台（べつと）を寄せてさびしく眠れり。
わが思惟するものは何ぞや
すでに人生の虚妄に疲れて
今も尚家畜の如くに飢ゑたるかな。
我れは何物をも喪失せず
また一切を失ひ盡せり。
いかなれば追はるる如く
歳暮の忙がしき街を憂ひ迷ひて
晝もなほ酒場の椅子に酔はんとするぞ。
虚空を翔け行く鳥の如く
情緒もまた久しき過去に消え去るべし。

十二月また来れり。
なんぞこの冬の寒きや。

訪ふものは扉を叩つくし
われの懶惰を見て憐れみ去れども
石炭もなく暖爐もなく
白堊の荒漠たる洋室の中
我れひとり寝台に醒めて
白晝もなほ熊の如くに眠れるなり。

正に「ニヒルの漂泊者の歌」である。朔太郎は遭遇した「ニヒルの漂泊者」の場をどう突き破ろうとしたか。「日本への回帰」第三章はそのことを表明している。その朔太郎の悲願を引いて、この小文を終ることとする。

「今や再度我々は、西洋からの知性によつて、日本の失はれた青春を回復し、古の大唐に代るべき、日本の世界的新文化を建設しようと意志してゐるのだ。」

個性的表現が集まったマスゲームを

山住正己

人々が国境をこえて仲良く交流する光景は美しい。大多数の人――むろん私もその一人――が、いたるところでそういう光景が展開されるのを望んでいる。

八月末、平壌の人民文化宮殿で南北朝鮮赤十字会談が開かれるというのは、この大多数の人々にとって、いいニュースであった。ところが、それが途中でおかしなことになった。二十八日の二回目の会談で、前日、韓国側代表団が金日成スタジアムで行なわれたマスゲームの参観を途中で切上げ退場したことを、朝鮮民主主義人民共和国側が「無礼な行動」と非難し、会談がうまくいかなくなったというのである。せっかく友好的な雰囲気になっていたのに、なんたることかと残念に思った。

私はそのマスゲームなるものの一端をテレビで見て、これはいけないと思った。北朝鮮側は人々の歴史を表現したものだと説明しているという。しかし競技場でくりひろげられているのは茶色の制服（軍服）を着、銃を手にした青年の大集団の、軍事教練さながらの

「マスゲーム」であり、スタンドでは、正確な文は新聞で知ったのだが、「党（朝鮮労働党）と首領（金日成主席）をいただいて朝鮮の栄光は限りなし」という文字や、その栄光を伝える歴史的場面が、人々のかかげる色板によって次々と色鮮かに、それこそ一糸乱れずに展示されたのである。

ここでは、もっとちがうマスゲームや人文字を見せてほしかった。赤十字は戦時の傷病兵救護に始まるが、平時の活動も多くなり、いま日本では赤十字といえば、まず各地の「日赤」病院であり、そこで診断・治療を受け、あるいは出産する人は多い。病気をなおし、子どもを生み育てるというのは、平和な世の中ではじめて可能であり、またそれらの行為そのものが平和を求めている。それは普遍人類的な願いであり、活動である。そういう赤十字の精神と、銃を持ったマスゲームや、特定の人物や政党礼讃の人文字とは、明らかにくいちがっていると思う。

夏の甲子園高校野球でも、整然とした人文字を見せてくれた高校があった。この大会では宗教団体の設立する高校が圧倒的な強さで優勝したが、その応援席では、生徒の持つ色板がさまざまな文字を見せてくれた。こういう光景を見ると、色板をかかげる若者たちはどんな気持でいるのだろうかと、つい思いをめぐらせてしまう。共通の目的——ここでは

野球の優勝——にむけて自分も一役を果したという充実感を味わっているのだろうか。その瞬間はきっとそう思っているのだろう。しかし、いつか、つまらないことに青春の情熱を注いだものだと、くやむことがあるかもしれない。

こういう目に余る画一的な人文字やらマスゲームには、うんざりするだけでなく、危険なものを感ずる。困ったことだと思っていたとき、この夏、ある教育の研究会で、東北の小さな小学校の子どもたちが演ずるマスゲームをヴィデオ・テープで見た。それは、たとえばスメタナの「モルダウ」にのって、子どもたちが舞い演ずるのだが、一人一人が自分で自分の動きを考え、創りだしている様子が実によくわかった。マスゲームはこういうものであってほしいと思った。秋に、この学校では公開研究会を開き、そこでマスゲームを見せてくれるという。ぜひ出かけて、ほんものをしっかり見てこようと思っているところである。

芸術的表現活動が人々を分裂させるのは悲しい。そうではなく、一人一人が個性的に動きながら全体として一つの方向に美しく動いていく、そういう表現を方々で創り出したいものである。

秋來（秋来る）

李賀

（松枝茂夫訳）

李賀（七九〇―八一六）、字は長吉。二十七歳で死んだ唐の天才詩人。「鬼才」という語はこの人のために出来た。この詩、秋風の音に驚いて、若き詩人は早くも死の予感におびえる。

桐風驚心壯士苦
衰燈絡緯啼寒素
誰看青簡一編書
不遣花蟲粉空蠹
思牽今夜腸應直
雨冷香魂弔書客
秋墳鬼唱鮑家詩
恨血千年土中碧

桐風　心を驚かし　壯士苦しむ、
衰灯　絡緯　寒素に啼く。
誰か看ん　青簡一編の書、
花虫をして粉に空しく蠹ましめじ。
思いに牽かれて今夜　腸応に直なるべし、
雨は冷たく香魂　書客を弔わん。
秋墳　鬼は唱う　鮑家の詩、
恨血　千年　土中の碧。

桐の葉をゆるがす風の音に、丈夫をもって任ずるわたしもさすがに胸つぶれる思いがする。消えかかる灯火のもと、ハタオリは寒さに泣きつつ機を織っている。わたしのこの一巻の詩集をだれが読んでくれるだろうか。空しく紙魚に食われて粉微塵にされずにすむだろうか。

苦しい思いに牽きずられて、今宵わたしの腸はまっすぐに伸びて（わたしは死んで）しまうにちがいない。雨の冷たく降りそそぐ時、香しい魂がこの哀れな書生を弔ってくれるだろう。秋の土饅頭のほとりで、亡霊たちが鮑照の詩を吟じてくれるだろう。そしてわたしの恨みをこめた血は、千年の後、土のなかで凝って碧玉となるだろう。

〈香魂〉古えのすぐれた詩人の魂。
〈鮑家詩〉六朝の詩人鮑照の詩、「代蒿里行」「代挽歌」などを指す。

秋浦歌

淺野　晃

秋に逢ひたくなつたら
秋浦にゆくことだ
そこで風はいつも秋
日ざしも人もいつも秋だ

疎林のうへに月が上ると
秋浦は一瞬にして白い
白い渚に白い水
天地に何の物音もない

ミニョンよ　どうしてお前
こんな処を歩いてゐる
ミルテの木もないロオレルの木もない
あるのは石楠と貞女林

ここではすべてが影だ
けれどじつにはつきり見える
あれはたしかにミニョンだ
小さく歩み去つてゆく

秋 ― 伊藤佐喜雄をおもふ

牛尾三千夫

伊藤佐喜雄の　寄こせし手紙も、秋の夜に、書きしが多し。さびしかりしか

伊藤佐喜雄　逝きて幾年、今年また夫人も逝きて、さびしくなりぬ

芥川賞を、受賞得ざりし　慨かひは、彼の一生の華やぎを消す

津和野なる　彼の生家を　訪ひし日は、土蔵の壁に　桜散り居り

宮崎智惠の家を教ふと、街行けば、ピアノなりゐる　二階屋なりし

松江の赤城館にて、語らひしは、伊澤蘭奢の遠き日のこと

伊藤佐喜雄の寄來せし文を今見れば、人に云ひ得ぬ、ことも書かれし

「日本浪曼派」を、書き上げしとう　たよりあり。久しかりしかこの人の文

まかふしぎ

小高根　太郎

眼に見えず手にもさわらぬ小さな小さな粒子たち。お前たちを創ったのは、そもそも全能の神なのか。あるいは盲の恐ろしい大魔女が生み落した父無し兒なのか。それとも何の原因も理由もなく、ただひょっこりと空無の中に浮び出た幻の泡なのか。

お前たちは化ける。無限に化ける。くっついたり結んだり、かたまったり溶けたりして。太陽に化け月に化け、星たちに化け大地に化け、草木に化け虫魚に化け、鳥獣に化け人間に化ける。

人間、この頭でっかちの化物。その硬い頭骸骨の中の軟い脳みそが、心やら魂やら精神を化生する。その化生のものは考える——万物の根源は、はたして何なのか。観察と実験と推論を重ねて、それはやがて見つけ出す、眼に見えず手にもさわらぬ小さな小さな粒子たちを。

限りなく化け続ける粒子たち、何とも不思議なこの世界。

鍵

杉山平一

ドアの鍵を色々さし込んでみるが
なかなかあかない
なかではしきりに電話が鳴っている

想い出のドアの鍵をさがすときも
オーイと呼んでいる声がして
しきりにあせるのだが

ドアが　やっとあいたとき
もう電話のベルは止んでいる
またしても

聖杯探求

坂口允男

荘厳の風の死んだ丘の上に
　騎士ギャラハドは黙って花を埋めた
追いすがる時の足音を
　　絶えず後に聞きながら

予言者マーリンより　円卓騎士団に
　失われた聖なる杯と槍を探し出せと
指令が伝えられた時
　彼の運命は既に定っていたのだ

彼の父、無比の騎士ランスロットも
　王妃ギニヴィアへの恋の罪故果し得ず
完璧の騎士ガウエンも魂に罪を負っていた
　純潔の騎士のみがこの使命に叶うのであった

聖杯は遂に見出され　水は湧き出て
　国土は豊饒をとりもどしたが
大願成就と同時に神に召された
　若き選ばれた者のひそかな悲しみを
遂に誰も知る者はなかった

訪問記

高橋　渡

——みなさん　陶芸家になりやんして
目の奥に泛ぶもの見据えては手仕事　四十年
訥々の口をそこで閉じる　そして息をつぐ
時に　その目ははるかな雷鳥の山なみにいる
——おれは親譲りの陶工
　賞のいくつかは貰ったが売屋にゃなれん
亡父の徳利で勧め
みずからも飲み　十年ぶりの歓談はつづく
蜩がまいこみ　黒光る自在鉤で鳴きはじめる
柱時計が三つ打つ　また鳴く

骨太な手は顎　躍る体抑えて蟬を聴いている
土のぬくもりを出すのが作陶と　あの
薪窯の火にゆめみ　おのれを賭けるすがただ
……それにしても　蹴りろくろとは
——体もそうだが　電気はつれない
　おれの頼みもきかずに　回すからな
語って羞らう目　その目に蜩が鳴いている

りんどうは山間の道
ぐいのみ　小皿をみやげに帰途につく
手におもく　彫られた昆虫鳥獣ははね
おいぬく麦藁帽子
ぶなの林を白い馬はたてがみなびかせ
いそぐ　あれは　少年のおれに　ちがいない

杞憂

石山直一

杞憂とは愚な取越苦労をした古人を笑う言葉
だ
その愚さを現代人の私も繰り返してみたい
天は落ちて来なくても　地の崩れ落ちる恐れ
はないのだろうか

私達の大地を支えている地球はその誕生の劫
初から空中に浮びつつ　太陽の周囲を規則正
しく運行し続けている

墜落の恐れのない大地に足を踏みしめて私達
は安心しているが　大地の正体は永久飛行中

の天然超ジャンボ機だ――この超ジャンボ機
には故障や墜落の危険は絶対にあり得ないの
か

何かの事情で宇宙の秩序に狂が生じるならば
この超ジャンボ機の正常な運行は不可能にな
り　軌道の外に投げ出されて　無限の虚空の
中を落下しつつ　木端微塵に砕け散ってしま
うかも知れない

そのような事が現実に起るのか起らないの
か　起るとすればいつ起るのか　またそれ
はどこでどのようにして決定されるのか――
そのような事は一切、私達人間には知る由も
ない

ただ私は思う
人知と人力とを遙に超えたところで　この
世界と私達の歴史が支えられているという事
――この事実に私は深い畏れを覚えずにはお
られない

「天地は過ぎゆかん　然れど我が言は過ぎ往
くことなし」
私達の究極の拠所はここのほかにあり得ない
のではなかろうか

国境

大野沢　緑　郎

綏芬河(すいふんが)の丘と家並がみえている

マクシーモフの妻は胸を病んでいた
幼い娘ワーリヤ
あんな寂しい東の果てが彼ら夏の保養地なのかと
北ぐにのきびしさかみしめて
庭の樹の林檎酒を飲んだ日

日は過ぎた
ウスリースクの流れにつながり
シホーテリアンの山山の南
旧名スーチャン・パルチザンスクの山奥で

シベリアのおわりの日おそろしい森林伐採が
ぼくらにまっていようとは

マクシーモフと家族はハルビンへ戻れたか
あとのゆくえは……

いまもロシア風の建物がそのままに緊迫する
ブラウン管の風景に息つめる

ポクラニーチナヤと彼らがよんでいた
わびしい国境の町とそのむこうになってしま
ったぼくらの空が

いまありありと映っている
あのときのまま　映しだされている

コルホーズ・夏

あの声音は実存の地平からのものか

暮れなずむシベリアの夏
白夜にとばりのおりる頃

とおい野面から娘たちのコーラスが聞えてくる
だれがリードするでもない　寄りそいの
美しい透きとおるハーモニーが
農家の床にごろ寝する
ぼくらのゆめに甘くまどろみ　はいってくる

いくばくの刻なく白白明けのあてない明日へ

何処からともない　せめてもの恩寵と

夜を歌う異国の娘たち
眠りもしらない夜空はてしなくながれ
微風のようにひろがっていっている

アムールの瑪瑙

さんご樹の眞赤な粒粒のむこうの蒼い空
濃青の空

わたしはかすかな縞模様の美しい鉱石を凝視
めている

オビメノウか　これは　奇跡のように届けら
れたアムールの瑪瑙

えんえんたる鉄路　かつての日の迹をあなた
はひたすら西東　そのかみ父うえの敷かれた
広野を辿られた　北のはたての町　黒龍江
おなじ河床に降りたたれたと
……拾ったのは晩秋　わたしのとおい日は霖
雨のなか……

ひとつはおん母に　そうしてもうひとつがこ
こに　わたしに

永い永い沈黙がいま語りかけてくる　なすす
べもない凝縮の年月のうえに

くるまれた中国の布箱のわたしに輝くばかり
の宝石のまえに

もう秋だ　秋もまぢかい　透きとおるしろ
い眞昼　かすかにゆらいでいる微風の窓辺

――高野悦子さんに

「四季」創刊と立原

江頭彦造

立原道造は昭和六年三月に旧制一高の理科甲類に入学し、わたしは同期に文科乙類に入学した。立原はその後、校友会雑誌昭和六年十月号（三三三号）に小説「あひみてののちの」を発表し、この評判が高く、文芸部長の立澤剛教授が賞讃し、文芸部委員も〈稀な才筆〉と讃めあげたので、わたしも立原の名を知ったのである。しかし個人的に知り合い親しくなったのは大分遅れて、昭和八年十月校友会誌三四三号（短篇小説特集号）にわたしは小説「春」を出し、その合評会が本郷正門前の白十字で開かれた時、文芸部委員だった杉浦明平や立原などと話しあい、急速に親しくなっていったのであった。わたしは中学時代の級友で、堀辰雄崇拝で、旧制福岡高校を経て東大独文一年になっていた沢西健を立原に紹介し、さらに猪野謙二を加えて、四人だけの雑誌を出そうというところまで段々話が発展した。これは昭和九年六月一日に堀辰雄から立原に津村信夫たちの雑誌「四人」を贈与されたということが大きな刺激になっている。この新雑誌は堀の「ルーベンスの偽画（昭8・1）」にちなんで「偽画」と名づけられ、創刊号（昭9・6・6）二号（昭9・9・15）

三号（昭9・11・20）の三冊が出された。創刊号には堀のアポリネール「水彩画家」の飜訳が寄稿されるという、気の入れようであった。

ところがこれと平行して月刊「四季」の話もすでに出ていた。堀の季刊「四季」の創刊は昭和八年の五月だが、この年の春の頃立原は堀を訪ねて面識を得ていたらしい。「あひみてののちの」や手製の詩集『日曜日』を堀に見せたということも考えられる。八年七月第二号の夏季号が出たまま、しばらく放ってあったのを、堀は三好を語らい、三好は丸山薫に話をつけて月刊「四季」とすることになり、若手の津村信夫・立原を加えて、九年六月六日に第一回打合わせを銀座のレインボウ・グリルで行ない、第二回打合わせを六月二十五日資生堂で、第三回の編集会議を六月三十一日堀宅で開いて、本決まりとなり、九年十月に創刊号を出した。つまりわれわれの「偽画」と月刊「四季」とはほとんど平行して刊行の話が進められたのであった。

面白いことにわたしはその間立原から月刊「四季」の話はほとんどまったく聞かされなかった。立原は昭和九年七月二十二日には軽井沢の「つるや」に沢西健とともに堀を訪ねている。この時は堀は上京して不在であった。立原は沢西には月刊「四季」のことを話したかもしれない。十月に月刊「四季」の創刊号が出てからわたしは「四季」のことを知っ

たわけであるが、その十月頃わたしは沢西に誘われて、新小梅町の自宅に堀を訪ねて、お宅や浅草公園の喫茶店〈こじき〉で話した。

この間の事情を今考えてみると、立原は先輩たちの雑誌「四季」に参加しながらも、より一層自分たちの意志が自由に伝達される自分たちの雑誌として「偽画」を持ちたかったのではないかと思う。毎号の同人費は十円で、当時学生の身分としては決して少額ではなかった。「偽画」が三号でつぶれると、立原は今度は猪野やわたしのほかに杉浦明平や寺田透・国友則房（本誌の同人）などを語らって、昭和十年五月一日「未成年」（一高の文芸部中心）を創刊することになる。月刊「四季」はその間着実に継続していた。「未成年」が十二年一月全九冊で廃刊になると、今度は追分で知りあった後輩の加藤周一・中村真一郎に、小山正孝・矢山哲二などを加えて、今度は「午前」を出そうと計画していた。これは一高の頃の恩師立沢剛の訳書『ツァラツストラ』を読んで感銘を受け、「午前」という誌名もここから採られたといえる。またこの頃の立原のソネットには時々『ツァラツストラ』から引用されたらしい語句が見られる。

これらの経緯において、立原はつねに当代の新詩人の第一人者としての旺盛な意気込みと熱血を見せているのだと思う。

（未完）

聖なる山

―世界名画の旅―

国友則房

久し振りに　聖なる山　を見る。
弱年に　初めて　荒々しいタッチの
セザンヌの　山塊に　打たれたが、
やがて　ルノワールの　柔肌を愛でて
老年に　また　セザンヌに帰った。

同じ野育ちの　せいだろう、
絵一筋に　生きながらも
セザンヌの山には　遊びがない――
額縁を越えて　広く　深く
孤独の強さと　憂愁が　みなぎる。

個体の中に　宇宙を見たので
屋内では　リンゴと水差し
屋外では　山塊だけを　描き続けた、
緑の丘と　土色の農舎の上に
三角の山稜が　切り立っている。

――少年の頃　親友のゾラが
祝って呉れた　一籠の
リンゴだけで　沢山だった、
僅か　千米余の　山塊だが
まこと＊聖なる勝利の　山である。

＊聖なる山……La Montagne Saint-Victoire.

湧き水

小杉茂樹

山陰の　田舎道を

通って行ったのはいく年前であったか

客年　夏

ふたたび　通ったときも

椎の古かぶ　竹笹の合間に

雲をうつしていた湧き水

渕のまわりの　汚れた蜘蛛の糸も

おんなじ風だ

眼鏡

福地邦樹

僕は眼鏡をかけている
それも相当に度がきつい
眼鏡をかけた人は物の本当の姿がわからないと
ある詩人に皮肉られたが
そんな馬鹿なことがあるものだろうか

めがねをはずすと

世界は途端にぼやけて風呂の中の景色のようになり
たしかに物の確かな形がわからなくなりそうで不安だ
しかしそばを通る女の人はみんな綺麗に見え
樹々は不思議に抽象化されて緑の粘着体となり
あたりは眼や口の瑣末を失った
一種陶酔を伴う前衛芸術の世界である

眼鏡をかけたりはずしたりすることで
僕はむしろ表面の詐術にごまかされないで
物の本質に出這入りしやすいようにも思えるのだ

筑波の小さな部屋から

たかはし　しげおみ

久しぶりのお写真拝見
君の背後（うしろ）の本棚がぼくの目をひくなあ
君のところでみなれた
「聖家族」「菜穂子」健在だね。

春さきの浄瑠璃寺で、思いもかけず
詩人を見かけたという　君の手に
「かげろふ……」があった、という
なんとも不思議な話は忘れられない。

それにしても知らない本のかずかず、
思い出すのはラファエロくらい、
マドンナ、マドンナはいいなあ。

この秋はひさびさに、手づくりの
マロングラッセでも、さげていこう。
君はおぼえているか、阿見の小さな家を。

浜木綿

花井　タヅ子

大ダコをさかさにした様に
葉を四方八方にのばし
種から育てて廿六年目に入った今年は
花茎を二本ものばし
花のさかりが終わると
茎は低く倒れ
おとろえを見せはじめた陽を吸い込んで
実をふくらませはじめる

ここでは波の音もなく
潮風も届かない
形は大きくなったのに
海から離れてさびしそう
せめてその種は
潮岬に行く事があったら
スコップを持って
砂浜に埋めて来よう
満潮引潮が共に強いと云われる
そこがあなたの故郷なのだから

次号原稿締切　11月末日

季刊　四　季　第八号　定価300円（送料200円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南1－40－8　田中克己方
電話　03－314－2783
印刷　橋本保印刷
〒536　大阪市城東区天王田7－24　電話 06－961－4330

同人略歴(4)

野田又夫

昭和8年　京大哲学科卒業
昭和10年　大阪高等学校講師
昭和22年　京都大学助教授・教授
昭和49年　停年退官、関西学院大教授
昭和53年　関西学院大停年退職、甲南女子大学教授
昭和59年　同上停年退職

著書は岩波新書三冊「パスカル」「ルネサンスの思想家たち」「デカルト」のほか「デカルトとその時代」(筑摩書房)「西洋近世の思想家たち」(岩波)「哲学の三つの伝統」(紀伊国屋書店)。著作集五巻(白水社)を古稀の記念に昭和56年に作って貰いました。

石山直一

昭和8年3月東京帝国大学文学部卒業。在学中コギト同人となり、野上吉郎のペンネームで同誌に小説を書く。

昭和8年12月東京信濃町教会で、高倉徳太郎牧師より受洗、その時の思いで文学活動を断念。

昭和16年9月千葉から故郷大阪へ帰り、日本基督教団堺教会へ転会、現在に至る。その間、旧制中学校、新制高等学校、短期大学、神学校で教職を続け、昭和59年3月満50年の教師生活に終止符を打つ。

現在は教会生活中心の自由な境涯。倫理学、宗教哲学、基督教神学の問題意識の中で求道中。

小高根太郎

東大文学部美術史科卒。東京工大講師、鉄斎研究所長を経て現在無職。著書多数。